



寺よりなる工為るやぐ賀茂の宮路

子多き物に播別室乃明神

に一つる神藏れ名少くぬぬ都

の賀茂と事社にるれ明神ハ河一壽

にくつ所ツを心まゝ糸福中さとい

程ははあまの立切のうもへと急作

播磨くむろのとほそのあけの

ろ行上

叔子むみ此明神より此系福に
 了や又是る故に矢ハ當社の所神神
 とも河神物をく此流矢の事
 するまあり〜この後なるは〜とありを
 うのうふ〜せぬの〜
 此のうれ叔と事社の神母を以て
 様とあるは其中よりして此矢乃

所謂ト云ハレシ委くわ〜り終ふ神〜
 神の所事とあり〜とある〜

此賀後の里よ〜の氏女と〜
 人知ふ父と此門邊は〜氷を〜
 神は手向するに〜白羽
 の矢一竹流き事り此氷桶と〜

—とらてくる玉毫の物よ
あ—思寸懐胎し男子とむり
生子三歳と申し時人々圓祐して父
はとくるはは天をこりてむらぬし
よば天則さふいうちとわら天
ア—あつるを神にたう別雷の神是也
その母をいふ神とてうら鴨三可乃

神社とむいふア—ア—ア—
ふとれまことの神母はを語り
ア—ア—ア—ア—ア—ア—
弓やうけの人の治りし代を信を
白羽れば百葉代のまゝまゝも弓毫
に張む心さう能とまけハる難や
扱—その天ハ上る代のまゝまゝの世

子あゝらぬ矢迄も心神持たす渭さ

つよ 京より不審し終へを隔あ

路一灯事も心くしくまきもに

ころも 印一流まれ様には 賀茂

の河津もつりおるの 下る志く河

上ハ 又まじらみも 早

ぬれ 石門やをまの 小川の傍けき

ハ ぼこまなりき所為てうまを

も 湯も印一江の傍うぬ心もて行

敷 川の者海心年れやのまわくも色

は 光信打一すてもぬらぬハもの

水 流まらふもつま一級をぬう平向

成 せうじくくまをくまふく

級 心のま 二寺よ 賀茂 小川 漱の

上戸手抄

早

早

早

早

早

上戸

結縁のすまひあはれ名難の所や
月雨随時れたその雲井く
いふのちの空際うかり
あつすの稲葉の露も
つたなきいづの雨を
てかりくろ足馬ハ
ほろやと移くやをとくる

すれりまの鼓代時
就も國去を守護し
は神徳と威光を顯り
てまわりの神も
さびくりにせほく
やまもまもるけい
海平なまのほろ神も天路に

